

### 3 オリンピックと大学と自治体

ロンドン事務所所長補佐 山口 敦子 (佐賀県派遣)

#### 1. 意外な場所でのオリンピック活用術

先日、ロンドン市内にあるブルネル大学に出張する機会がありました。JETプログラムにおいてこの夏、国際交流員 (CIR) や外国語指導助手 (ALT) として日本に赴任する英国からの新規参加者 142 名に向けたオリエンテーションに出席するためです。

会場であるブルネル大学は、地元自治体などのいろんな機関を巻き込みながら実に上手にオリンピックを活用しているのです。

#### 2. ブルネル大学の戦略

ブルネル大学はロンドン市の西部にあり、英国の玄関口ヒースロー国際空港から車で 15 分、ロンドンの中心部からも地下鉄 (といっても、ほんとの地下はごく一部ですが。) 40 分程度でアクセスできる好立地の大学です。その設立は 1966 年と非常に新しい学校ですが、さらに 4 年前 (2008 年) には近代的教育施設や最新のスポーツ施設を 2 億 5,000 万ポンド (300 億円以上) かけて新設しています。

ブルネル大学に最寄りの駅は「UXBRIDGE (オックスブリッジ)」駅。駅に到着し、改札を出ようとすると、ふと改札に張り付けてある広告 (右下) に目がとまりました。



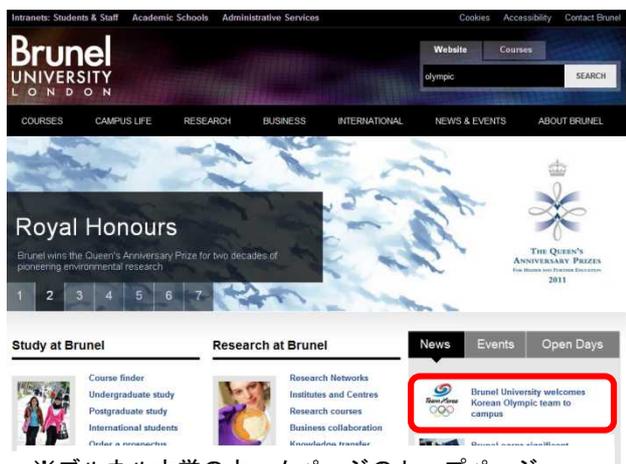
なぜだか、ブルネル大学が韓国チームの応援を行っているのです。その隣には、カナダのパラリンピックチームを応援しているとの広告も。

調べてみると、韓国チームの

中でも特にメダルの期待が高いテコンドー、ボクシング、競泳などの一部競技の選手達は、選手村ではなくブルネル大学で最新鋭のトレーニング設備を使いながら最終調整を行っているのです。また、大学側も食事も含めてこの選手たちを体系的にサポートしているようです。さらに、選手村からよりも会場が集まるロンドン市内へのアクセスが容易との地理的条件の良さも魅力的です。

### 3. オリンピック特需を乗りこなす

この施設利用に関しては、2011年4月、ブルネル大学と韓国オリンピック委員会とのあいだで覚書を交わしています。その施設の中には、ブルネル大学の地元ヒリンドン区の公営50mプールの利用も含まれています。



※ブルネル大学のホームページのトップページ

また、ロンドンオリンピック組織委員会はこの覚書の締結時に「この覚書を通じて、韓国とブルネル大学にスポーツや教育分野における強固な関係が構築されることを望む。」と発言しており、地域そして国を挙げてこの覚書を支援している姿が伺えます。

ブルネル大学のホームページをのぞいてみると、トップページに韓国チームへの支援を打ち出しており、その内容はいかに素晴らしい選手たちが利用しているか、そして何より韓国のマスコミが取材に大挙として訪れていることが記載されています。

イギリスでは国家財政の危機的状況を背景に、今年の9月から大学の学費が約3倍に跳ね上がります。どの大学も生き残りをかけて必死です。

そんな中、自己の特色をうまく利用し、また地元自治体などを巻き込みながら、オリンピックという特需をうまく乗りこなすブルネル大学の戦略にたくましさを感じました。

また、地元自治体の側からみても、既存の公共施設を提供することで官学一体となった今回の取り組みが実施できたことは、地元経済の活性化や国際交流の促進という側面からみても非常に大きな意義があったのではないのでしょうか。

現在、2020年の夏季オリンピックの東京招致が展開されています。

もし、日本にオリンピックがやってきたら、自分の自治体はどんなふうにオリンピック特需を乗りこなせるか考えてみるのも楽しいかもしれません。



※ブルネル大学構内。オリンピックに染まっています。